

# 高校生のキャリア教育に関する研究

— 生徒4,069名の生活実態調査の結果をもとに —

小 谷 正 登

## I. 問題と目的

1999年12月16日、中央教育審議会は同年11月6日に当時の文部科学大臣から出された諮問「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」に対する答申を出した。この答申において、政策文書として始めて「キャリア教育」という用語が用いられている。その後2003年に「若者自立・挑戦戦略会議」が内閣府に設置された。そのもと翌2004年に「若者自立・挑戦プランの推進」が取りまとめられ、「教育段階から職場定着に至るキャリア形成及び就職支援」など、社会の構造変化に応じた若年層のための新しい教育・人材育成・雇用・創業政策を展開することを目的とした様々な政策提言がなされた。これ以降、文部科学省、経済産業省、厚生労働省の各省は共同施策を行うとともに、それぞれでのキャリア教育施策も展開している。

以上のような政策展開の背景には、現在の日本における経済・産業構造の変化とそれに伴う雇用形態の多様化などの影響を受け、若年層の進路に関する状況が大きく変容していることがあげられる。そして、若年層にとって将来が不透明で困難な状況が生れ、「フリーター」の増加や「NEET」<sup>1)</sup>、ワーキングプア<sup>2)</sup>などの問題が社会問題として顕在化している。

このような中、2015年の高等学校卒業者の進路状況では、大学・短大進学率は54.6%、専門学校進学率は16.7%、高卒者の就職率17.7%である。大学(学部)卒業者の進路状況では、就職者の割合は72.6%、大学院などへの進学率が12.2%、そして「一時的な仕事に就いた者・進学も就職もしていない者」の割合は、12.4%に及ぶ<sup>3)</sup>。

そして、新卒で就職した者のうち、3年以内に離職する者が中卒者で7割、高卒者で5割、大卒者で3割になることを表す「七五三現象」という状態が長く続いている<sup>4)</sup>。また、入社3年を超えてから離職した正社員の離職理由として、「会社に将来性がない」(36.7%)、「賃金や労働時間の条件が良くない」(32.7%)、「キャリア形成の見込みがない」(31.6%)が上位にあげられる一方、入社1年以内で離職した正社員の離職理由として、「仕事が自分に合わない」(39.1%)「賃金や労働時間の条件が良くない」(32.6%)、「人間関係が良くない」(28.3%)

などの理由が上位を占める<sup>5)</sup>。

このような状況に対して、文部科学省により2004年に「キャリア教育の推進に関する総合的調査協力者会議の報告書～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～」が公表され、2008年7月に閣議決定された教育振興基本計画では、小学校段階からのキャリア教育、特に中学校を中心とした職場体験活動や普通科高等学校での取組を推進することが盛り込まれた。そして、特に高等学校に対しては、生徒が社会の変化に応じ、将来を生きる力を身につけ、主体的に自己の進路を選択し決定できる資質と能力を育成することが求められている。

そこで、小谷(2014)は「キャリア発達にかかわる諸能力(4領域8能力)」としてあげられている情報活用能力、将来設計能力、意思決定能力などの多くの能力と関連を持つキャリアプランニング能力(「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力)の中核と考えられる将来設計能力に注目し、小学生を対象とした生活実態調査の結果から、将来設計能力の一要因として将来の生き方や生活を考えることにつながる「夢の有無」の状態と児童の生活および心身の諸側面の関連を分析・考察している。その結果、将来の「夢の有無」と生活の諸側面の好ましい状態との関連を示している。しかし同論文では特に重要な進路選択・決定を行う高校生(以降、生徒と表記)を対象とはしていない。また高橋(2008)は、中等教育における重要な教育課題の一つとして将来設計能力の育成をあげている。そこで本論文では、高校生を対象とした生活実態調査の結果から、将来の生き方や生活を考えることにつながると推測できる将来設計能力の状態と生徒の生活および心身の諸側面の関連を分析・考察し、キャリア教育が学校教育のみならず、社会全体で取り組むべき教育であることの意義について検討を行う。

## II. 方法

### 1. 調査・分析対象

A 県立高等学校10校に在籍する高校生4,093名(1年

生1,423名；2年生1,239名；3年生1,420名；学年不明11名，男子2,141名；女子1,993名；性別不明19名）を対象に調査を行い、回答を得た。このうち、回答に不備のあった者を除く4,014名（1年生1,399名；2年生1,219名；3年生1,396名，男子2,108名；女子1,906名）を分析の対象とした。

## 2. 調査方法・時期

A 県立高等学校長協会との共同で調査協力が得られた A 県立高等学校10校において、「高校生の生活実態に関する調査」として、生徒、その保護者および教師対象の3種類の質問紙調査（無記名・自記式）を行った。調査時期は2010年11月～2011年1月であった。なお、保護者および教師の回答結果は既に分析・考察が終了しているため（小谷，2012）、本論文ではこれらを分析対象外としている。

## 3. 調査内容

白石（2006）が行った生活実態調査の調査項目を参考に、筆者らで作成した質問項目を用いて、「高校生の生活実態に関する調査」を実施した。本調査の質問紙項目の内容は、以下の通りである（表1）。

- (1)フェイスシート：学年、性別、在籍学科の3項目
- (2)生徒本人の生活実態について
  - ①睡眠：起床時の状態、平均睡眠時間など7項目
  - ②食事：朝食の欠食登校、食事の内容など13項目
  - ③放課後の過ごし方：部活動の参加状況、学習状況、メディアの利用状況など17項目
  - ④学校生活の状況：主観的なクラス内成績順位など4項目
  - ⑤情緒・感情・身体的側面：疲労感、焦燥感の有無など9項目
  - ⑥家族・他者との関係：家族との会話の有無など4項目

以上の計57項目について多肢選択法で尋ねるとともに、評定尺度法で自尊感情（10項目）を測定した。

## 4. 倫理的配慮

学校を通じて生徒対象質問紙と保護者対象質問紙を保護者に配布し、保護者による厳封の上、担任教師を通じて回答を回収した。また、教師対象質問紙も同様の方法を取り、人権保護と個人情報保護に配慮した。なお調査実施にあたり、著者の所属機関による倫理審査と承認を受けた。

## 5. データ分析

仮説の検討と各調査項目の変数間の関係を確認するため、 $\chi^2$ 検定およびハバーマン（Haberman）法による残

差分析を行った。また自尊感情の測定にあたっては、Rosenberg（1965）の自尊感情尺度の日本語版尺度（星野，1970）の項目を大学教員6名（臨床心理士・学校心理士各2名を含む）、公立小学校・中学校教員各2名計10名によって対象者が回答しやすいような文言に修正し、調査を実施した。質問項目は、逆転項目5項目を含む10項目で構成されている。評定は4件法を用い、「とても思う」を4点、「思う」を3点、「思わない」を2点、「全然思わない」を1点（逆転項目ではこの反対）とした。10項目による尺度得点の理論的範囲は10～40点となる。そして、自尊感情と将来設計能力の関係を確認するため、 $\chi^2$ 検定と残差分析に加え、分散分析および多重比較も行った。なお、SPSSバージョン24を使用して全てのデータの分析にあたった。

## III. 結果と考察

### 将来設計能力と生活実態を示す諸項目との関連

キャリアプランニング能力の具体的な要素として、学ぶこと・働くことの意義や役割の理解、多様性の理解、将来設計、選択、行動と改善等があげられ、その中核と考えられる将来設計能力は、「夢や希望を持って将来の生き方や生活を考え、現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する力」と定義される<sup>6)</sup>。

これをもとに、将来設計能力の一側面を示すものではあるが、将来の夢を持っていれば将来設計能力が高いと考え、「将来の夢の有無」について尋ねた質問（Q46：将来の夢がある）に対する「とてもあてはまる」、「わりとあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「全くあてはまらない」の回答の中で、「とてもあてはまる」（1,545名）を将来設計能力が高い群（以降、能力高群）、「あまりあてはまらない」（944名）と「全くあてはまらない」（524名）を合わせて将来設計能力が低い群（以降、能力低群，計1,468名）、そして「わりとあてはまる」（1,065名）をその中間にある群（以降、能力中群）として群分けを行った。次に、将来設計能力の高さと高校生の生活実態を示す項目との関連を検討することを目的に、「将来の夢の有無」の状態（能力高・中・低群）と生活実態項目のクロス集計を行い、 $\chi^2$ 検定を実施した。 $\chi^2$ 検定の結果は、表1に示す通りである。次に、 $\chi^2$ 検定の結果によって有意差が確認されたものについて、仮説の検討と変数間の関係を確認するため、ハバーマン（Haberman）法による残差分析を行った。なお、この残差分析の結果において示された調整済残差の値（太字の値）が「+1.96」を超えていればこのセル中の割合が5%水準で有意に高く、「-1.96」を下回っていればそのセルの割合が5%水準で有意に低いとすることができる（竹原，2007）。

表1 将来設計能力（高群・中群・低群）と高校生（1～3年生）の生活実態との関係

質問項目の Kategorii・内容/将来設計能力高群 (n=1,543)	将来設計能力中群 (n=1,062)	将来設計能力低群 (n=1,464)	全体 (n=4,069)	$\chi^2$	df	p
<b>基本的属性</b>						
性別（男子：n=2,108・52.5%/女子：n=1,906・47.5%）				48.79	2	***
学年（1年生：n=1,418・34.8%/2年生：n=1,237・30.4%/3年生：n=1,414・34.8%）				28.42	4	***
学科（普通科：n=3,315・81.9%/工業科：n=658・16.3%/その他：n=73・1.8%）				16.43	4	**
<b>睡眠</b>						
平日の起床時刻（6時以前：n=969・23.9%/6時30分～7時：n=2,197・54.2%/7時30分以降：n=884・21.8%）				19.26	4	**
平日の就寝時刻（0時以前：n=2,463・60.9%/0時30分頃n=578・14.3%/1時以降n=1,005・24.8%）				14.64	4	**
平均睡眠時間（平日・夜間） （6時間以下：n=1,986・49.4%/6時間超～7時間以下：n=1,483・36.9%/7時間超：n=549・13.7%）				4.54	4	.338 n.s.
昼間の眠気（よくある：n=2,089・51.5%/時々ある：n=1,481・36.5%/あまり・全くない：n=490・12.1%）				16.38	4	**
午睡の有無（よく・時々ある：n=1,770・43.7%/あまりない：n=1,211・29.9%/全くない：n=1,070・26.4%）				14.17	4	**
寝つきの悪さ（よく・時々ある：n=1,262・31.1%/あまりない：n=1,409・34.7%/全くない：n=1,389・34.2%）				16.33	4	**
起床時の目覚めの状態（睡眠高群：n=644・15.9%/睡眠中群：n=1,576・38.8%/睡眠低群：n=1,842・45.3%）				68.62	4	***
<b>食事</b>						
朝食の欠食登校（よく・時々する：n=796・19.5%/あまりしない：n=521・12.8%/全くしない：n=2,755・67.7%）				10.39	4	*
朝食の種類数（1種類：n=1,439・36.6%/2種類：n=1,208・30.7%/3種類以上：n=1,286・32.7%）				15.87	4	**
夕食の孤食（よく・時々する：n=1,515・37.3%/あまりしない：n=1,143・28.1%/全くしない：n=1,404・34.6%）				15.69	4	**
家族そろっての夕食 （よくする：n=1,037・25.5%/時々する：n=1,162・28.6%/あまり・全くしない：n=1,864・45.9%）				14.75	4	**
夕食時のTV視聴（よくする：n=2,771・68.2%/時々する：n=694・17.1%/あまり・全くしない：n=599・14.7%）				8.64	4	†
食事の楽しさ（よく感じる：n=1,728・42.5%/時々感じる：n=1,448・35.6%/あまり・全く感じない：n=891・21.9%）				80.29	4	***
食前の挨拶（よくする：n=2,132・52.4%/時々する：n=830・20.4%/あまり・全くしない：n=1,104・27.2%）				120.51	4	***
炭酸飲料の摂取（よく・時々する：n=2,852・70.2%/あまり・全くしない：n=1,213・29.8%）				9.97	2	**
スナック菓子の摂取（よく・時々する：n=2,658・65.3%/あまり・全くしない：n=1,410・34.7%）				23.13	2	***
既製の弁当の摂取（よく・時々する：n=1,472・36.2%/あまり：n=1,790・44.0%/全くしない：n=809・19.9%）				9.90	4	†
即席ラーメンなどの摂取（よく・時々する：n=2,306・56.7%/あまり・全くしない：n=1,764・43.3%）				14.29	2	**
ファストフードの摂取（よくする：n=505・12.4%/時々する：n=1,992・49.0%/あまり・全くしない：n=1,571・38.6%）				4.70	4	.319 n.s.
野菜の摂取（よくする：n=2,095・51.5%/時々する：n=1,477・36.3%/あまり・全くない：n=494・12.1%）				65.83	4	***
<b>放課後の過ごし方（友人関係・遊びなど）</b>						
部活動（所属：n=2,321・58.1%/無所属：n=1,672・41.9%）				2.75	2	.253 n.s.
部活動参加度（よくする：n=1,777・43.7%/時々する・あまりしない：n=589・14.5%/全くしない：n=1,697・41.8%）				2.16	4	.706 n.s.
屋外での遊び（よくする：n=364・9.0%/時々する：n=836・20.6%/あまり・全くしない：n=2,866・70.5%）				19.90	4	**
家でのゲーム遊び（よく・時々する：n=1,362・33.5%/あまりしない：n=1,044・24.9%/全くしない：n=1,691・41.6%）				42.71	4	***
ゲームソフトなどの使用時間（しない～30分：n=2,5304・62.6%/1～2時間未満：n=679・16.8%/2時間以上：n=831・20.6%）				20.89	4	***
ゲームセンターなどでの遊び （よくする：n=91・2.2%/時々する：n=356・8.8%/あまりしない：n=774・19.1%/全くしない：n=2,835・69.9%）				9.74	6	.136 n.s.
学校・塾の宿題（よくする：n=926・22.8%/時々する：n=1,256・30.9%/あまり・全くしない：n=1,884・46.3%）				75.31	4	***
塾や習い事の利用（よくする：n=591・15.0%/時々する：n=534・13.5%/あまり：n=224・5.7%/全くしない：n=2,598・65.8%）				17.20	6	**
1週間の塾などの日数（0日：n=2,761・68.0%/1～2日：n=803・19.8%/3～毎日：n=480・11.8%/その他：n=17・0.4%）				32.23	6	***
1回の塾などの時間（30分～1時間30分位：n=509・39.4%/2時間位：n=360・27.9%/2時間30分以上：n=422・32.7%）				6.36	4	.174 n.s.
平均自宅学習時間（しない～30分位：n=2,205・54.2%/1～1時間30分：n=1,011・24.9%/2時間以上：n=851・20.9%）				43.37	4	***
TVなどの視聴時間（見ない～1時間30分：n=1,656・40.8%/2～2時間30分：n=1,270・31.3%/3時間以上：n=1,128・27.8%）				13.67	4	**
携帯電話の所持（所持：n=3,961・97.2%/不所持：n=113・2.8%）				11.53	2	**
携帯電話の平均使用時間（持っていない～30分以下：n=800・21.1%/1～1時間30分位：n=1,017・26.8%/2～2時間30分位：n=709・18.7%/3時間以上：n=1,263・33.3%）				17.65	6	**
アルバイトの実施（よく・時々する、あまりしない：n=665・16.4%/全くしない：n=3,400・83.6%）				11.12	2	**
家事の手伝い（よくする：n=567・13.9%/時々する：n=1,427・35.1%/あまりしない：n=1,381・33.9%/全くしない：n=695・17.1%）				110.92	6	***
<b>学校生活</b>						
学校に対する親和感情（とても好き：n=766・18.8%/好き：n=1,930・47.4%/好きではない・嫌い：n=1,378・33.8%）				194.60	4	***
登校拒否的感情（よく感じる：n=750・18.4%/時々感じる：n=1,420・34.8%/あまり・全く感じない：n=1,906・46.8%）				46.52	4	***
授業の理解度（よくわかる：n=322・7.9%/わかる：n=2,123・52.1%/あまり・全くわからない：n=1,627・40.0%）				118.11	4	***
主観的クラス内成績順位（上位群：n=1,016・27.5%/中位群：n=1,344・33.4%/下位群：n=1,575・39.1%）				9.68	4	*
<b>情緒・感情・身体的側面</b>						
日常の肯定的感情（とても楽しい：n=949・23.3%/楽しい：n=1,849・45.4%/あまり・全く楽しくない：n=1,271・31.3%）				226.58	4	***
疲労感の有無（よくある：n=2,128・52.2%/時々ある：n=1,628・39.9%/あまり・全くない：n=321・7.9%）				10.96	4	*
焦燥感の有無（よくある：n=1,370・33.7%/時々ある：n=1,763・43.3%/あまり・全くない：n=938・23.0%）				17.59	4	**
虚無感の有無（よくある：n=841・20.6%/時々ある：n=1,434・35.2%/あまり・全くない：n=1,800・44.2%）				25.38	4	***
倦怠感の有無（よくある：n=870・21.4%/時々ある：n=1,594・39.2%/あまり・全くない：n=1,606・39.5%）				54.10	4	***
攻撃的感情の有無（よくある：n=661・16.2%/時々ある：n=1,191・29.3%/あまり・全くない：n=2,218・54.5%）				23.77	4	***
攻撃的行動の有無（よく・時々ある、あまりない：n=2,451・60.2%/全くない：n=1,620・39.8%）				8.14	2	*
腹痛などの有無（よくある：n=821・20.1%/時々ある：n=1,286・31.5%/あまり・全くない：n=1,970・48.3%）				13.00	4	*
最近の気持ち（ポジティブな感情：n=1,817・47.9%/ネガティブな感情：n=1,974・52.1%）				9.26	2	*
自尊感情3群（高群：n=1,166・29.5%/中群：n=1,467・37.1%/低群：n=1,326・33.5%）				53.01	4	***
<b>家族・他者との関係</b>						
家族との会話（よく話す：n=1,388・34.3%/時々話す：n=1,578・39.0%/あまり・全く話さない：n=1,078・26.7%）				112.42	4	***
家族の傾聴的態度（真剣に聞いてくれる：n=3,295・81.9%/聞いてくれない：n=727・18.1%）				35.87	2	***
相談相手の有無（いる：n=3,369・83.7%/いない：n=657・16.3%）				58.87	2	***
困った時の一番の相談相手（母：n=968・29.5%/父：n=90・2.7%/兄弟：n=153・4.7%/先生：n=32・1.0%/友人：n=1,916・58.3%/その他：n=125・3.8%）				25.40	10	**

\*\*\* p < .001 \*\* p < .01 \* p < .05 † p < .10

注 表中の各項目の( )内は、例えば(A/B/C)の場合、各質問項目の内容の選択肢がA・B・Cの3つであることを示している。

1～3年生全学年の生徒の基本的属性との関係について、学年、性別および学科で有意な差があった。学年との関係では、能力高群の割合は1年生 (n=492, **-3.1**) と2年生で有意に低く (n=438, **-2.2**)、3年生で有意に高かった (n=613, **5.2**)。次に、性別との関係では、能力高群の割合は男子で有意に低く (n=706, **-6.0**)、女子で有意に高かった (n=814, **6.0**)。反対に能力低群の割合は男子で有意に高く (n=855, **6.4**)、女子で有意に低かった (n=588, **-6.4**)。

以上から、学年が進むにつれて将来設計能力が高くなるとともに、小学校調査の結果 (小谷, 2014) と同様、男子より女子の方で同能力が高い傾向にあることが示された。

①睡眠：平日の平均起床時刻との関係では、能力高群の割合は「6時以前」の群で有意に高く (n=410, **3.2**)、「7時30分以降」の群で有意に低かった (n=304, **-2.5**)。反対に、能力低群の割合は「6時以前」の群で有意に低く (n=316, **-2.4**)、「7時30分以降」の群で有意に高かった (n=361, **3.5**)。

平日の平均就寝時刻との関係では、能力高群の割合は「0時以前」の群で有意に高く、「1時以降」の群で有意に低かった。反対に、能力低群の割合は午後「0時以前」の群で有意に低く、「1時以降」の群で有意に高かった (表2)。なお、平均睡眠時間 (平日・夜間) との関係では、有意な差はなかった。

次に目覚めの状態との関係では、小谷 (2015) と同様に、「起床時の目覚めの状態」について尋ねた質問 (Q9：朝すっきり目がさめる・気分よく起きられる) に対する「よくある」、「時々ある」、「あまりない」、「全くない」の回答の中で、「よくある」を睡眠の質が高い群 (睡眠高群)、「あまりない」と「全くない」を合わせて睡眠の質が低い群 (睡眠低群) そして「時々ある」をその中間にある群 (以降、睡眠中群) として群分けを行った。能力高群の割合は睡眠高群で有意に高く (n=323, **7.0**)、睡眠低群で有意に低かった (n=615, **-5.4**)。反対に、能力低群の割合は、睡眠高群で有意に

低く (n=174, **-5.1**)、睡眠低群で有意に高かった (n=752, **5.9**)。

昼間の眠気との関係では、能力低群の割合は「よくある」群で有意に高く (n=794, **2.8**)、「あまり・全くない」群で有意に低かった (n=3,364, **-3.0**)。

さらに、帰宅後の午睡の有無との関係では、能力高群の割合は「よく・時々ある」群で有意に低く (n=627, **-2.9**)、「全くない」群で有意に高かった (n=451, **3.3**)。反対に、能力低群の割合は「よく・時々ある」群で有意に高く (n=675, **2.6**)、「全くない」群で有意に低かった (n=356, **-2.1**)。

夜の寝つきの悪さとの関係では、能力高群の割合は「全くない」群で有意に高く (n=565, **2.6**)、反対に能力低群の割合は有意に低かった (n=457, **-2.9**)。

以上から、高校生においても、就寝時刻に加え、学校によって設定された登校時刻によって一定した傾向にある起床時刻との関係から、就寝時刻・起床時刻の遅延化 (「遅寝・遅起き」) が、将来設計能力の高さと関連していることが示された。さらに、前夜の睡眠の質と関係がある昼間の眠気、日中の諸活動と関係がある入眠の状態の一側面である寝つきの悪さ、および午睡の有無と将来設計能力の高さとの間に関連性のあることが確認された。

②食事：朝食の欠食登校との関係では、能力低群の割合は「全くしない」群で有意に低かった (n=960, **-2.1**)。朝食の種類数との関係では、能力低群の割合は「1種類」の群で有意に高く (n=562, **3.2**)、「3種類以上」の群で有意に低かった (n=423, **-2.7**)。次に夕食の孤食との関係では、能力高群の割合は「全くしない」群で有意に高く (n=577, **3.0**)、反対に能力低群の割合は有意に低かった (n=464, **-2.8**)。そして、家族そろっての夕食との関係では、能力高群の割合は「よくする」群で有意に高く (n=440, **3.5**)、「あまり・全くない」群で有意に低かった (n=675, **-2.1**)。反対に、能力低群の割合は「よくする」群で有意に低く (n=343, **-2.3**)、「あまり・全くしない」群で有意に高かつ

表2 将来設計能力 (高群・中群・低群) × 平均の平均就寝時刻

	「0時以前」群	「0時30分頃」群	「1時以降」群	合計	$\chi^2(df=4)$
設計能力高群	979(24.2%) <b>2.8</b>	216(5.3%) <b>-0.4</b>	344(8.5%) <b>-2.9</b>	1,539(38.0%)	14.64**
設計能力中群	650(16.1%) <b>0.5</b>	152(3.8%) <b>0.1</b>	255(6.3%) <b>-0.6</b>	1,057(26.1%)	
設計能力低群	834(20.6%) <b>-3.3</b>	210(5.2%) <b>0.3</b>	406(10.0%) <b>3.5</b>	1,450(35.8%)	
合計	2,463(60.9%)	578(14.3%)	1,005(24.8%)	4,046(100.0%)	

太字：調整済み残差

\*\*p < .01

た (n=708, 2.4)。

食事の楽しさとの関係では、能力高群の割合は「よく感じる」群で有意に高く、「あまり・全く感じない」群で有意に低かった。反対に、能力低群の割合は「よく感じる」群で有意に低く、「あまり・全く感じない」群で有意に高かった (表3)。

食前の挨拶との関係では、能力高群の割合は「よくする」群で有意に高く (n=949, 9.1)、「あまり・全くしない」群で有意に低かった (n=314, -7.6)。反対に、能力低群の割合は「よくする」群で有意に低く (n=636, -8.6)、「あまり・全くしない」群で有意に高かった (n=520, 9.0)。なお、夕食のTV視聴との関係では、有意な傾向のみが見られた。

体調に大きな影響を与えると考えられる食事の内容については、以下の6項目について分析を行った。炭酸飲料の摂取、スナック菓子の摂取および即席ラーメンなどの摂食との関係では、能力高群の割合は「よく・時々する」群で有意に低く (炭酸飲料：n=1,039, -3.0・スナック菓子：n=938, -4.7・即席ラーメン：n=819, -3.6)、「あまり・全くしない」群で有意に高かった (炭酸飲料：n=503, 3.0・スナック菓子：n=604, 4.7・即席ラーメン：n=724, 3.6)。反対に、能力低群の割合は「よく・時々する」群で有意に高く (炭酸飲料：n=1,060, 2.5・スナック菓子：n=1,007, 3.5・即席ラーメン：n=875, 3.0)、「あまり・全くしない」群で有意に低かった (炭酸飲料：n=401, -2.5・スナック菓子：n=456, -3.5・即席ラーメン：n=588, -3.0)。

野菜の摂取との関係では、能力高群の割合は「よくする」群で有意に高く (n=901, 6.9)、「あまり・全くしない」群で有意に低かった (n=138, -4.9)。反対に、能力低群の割合は「よくする」群で有意に低く (n=653, -6.6)、「あまり・全くしない」群で有意に高かった (n=229, 5.1)。なお、既製の弁当の摂食との関係では有意な傾向のみが見られ、ファストフードの摂取との関係では有意差はなかった。

以上から、将来設計能力の高さと朝食の種類数を始め

とする食事の状態、夕食の孤食および家族そろっての夕食など食事の形態、加えて食事の内容との間に関連があることが明らかになり、食生活に関する環境と将来設計能力の高さの間に一定の関係があることが示唆された。なお、「食事の楽しさ」および「食前の挨拶」との関係からは、将来設計能力が家族関係を含めた人間関係のあり方と関連のあることが推測できる。

③放課後の過ごし方 (友人関係・遊びなど)：友人関係・遊びについては、以下の4項目であった。

屋外での遊びとの関係では、能力高群の割合は「よくする」群で有意に高く (n=174, 4.1)、「あまり・全くしない」群で有意に低かった (n=1,054, -2.3)。家でのゲーム遊びとの関係では、能力高群の割合は「よく・時々する」群で有意に低く (n=455, -4.2)、「全くしない」群で有意に高かった (n=734, 6.1)。反対に、能力低群の割合は「よく・時々する」群で有意に高く (n=544, 3.7)、「全くしない」群で有意に低かった (n=527, -5.4)。

ゲームソフトなどの使用時間との関係では、能力高群の割合は「しない~30分」の群で有意に高く、「2時間以上」の群で有意に低かった。反対に、能力低群の割合は「しない~30分」の群で有意に低く、「2時間以上」の群で有意に高かった (表4)。なお、ゲームセンターなどでの遊びとの関係では、有意な差はなかった。

学習面などに関しては、以下の5項目であった。学校・塾の宿題の実施状況との関係では、能力高群の割合は「よくする」群で有意に高く、「あまり・全くしない」群で有意に低かった。反対に、能力低群の割合は「よくする」群で有意に低く、「あまり・全くしない」群で有意に高かった (表5)。

塾や習い事の利用状況との関係では、能力高群の割合は「よくする」群で有意に高く (n=284, 4.7)、「全くしない」群で有意に低かった (n=972, -2.8)。反対に、能力低群の割合は「よくする」群で有意に低く (n=170, -4.6)、「全くしない」群で有意に高かった (n=1,029, 4.5)。次に、1週間の塾などの日数との関係では、能力

表3 将来設計能力 (高群・中群・低群) × 食事の楽しさ

	「よく感じる」群	「時々感じる」群	「あまり・全く感じない」群	合計	$\chi^2(df=4)$
設計能力高群	774(19.0%)	489(12.0%)	278(6.8%)	1,541(37.9%)	80.29***
	7.8	-4.0	-4.7		
設計能力中群	439(10.8%)	408(10.0%)	217(5.3%)	1,064(26.2%)	
	-0.9	2.2	-1.4		
設計能力低群	515(12.7%)	551(13.5%)	396(9.7%)	1,462(35.9%)	
	-7.0	2.1	6.0		
合計	1,728(42.5%)	1,448(35.6%)	891(21.9%)	4,067(100.0%)	

太字：調整済み残差

\*\*\*p < .001

表4 将来設計能力（高群・中群・低群）×ゲームソフトなどの使用時間

	「しない～30分」群	「1時間～2時間未満」群	「2時間以上」群	合計	$\chi^2(df=4)$
設計能力高群	1,013(25.1%) <b>3.6</b>	237(5.9%) <b>-1.8</b>	282(7.0%) <b>-2.7</b>	1,532(37.9%)	20.89***
設計能力中群	659(16.3%) <b>-0.1</b>	193(4.8%) <b>1.5</b>	203(5.0%) <b>-1.2</b>	1,055(26.1%)	
設計能力低群	858(21.2%) <b>-3.5</b>	249(6.2%) <b>0.4</b>	346(8.6%) <b>3.8</b>	1,453(36.0%)	
合計	2,530(62.6%)	679(16.8%)	831(20.6%)	4,040(100.0%)	

太字：調整済み残差      \*\*\*p < .001

表5 将来設計能力（高群・中群・低群）×学校・塾の宿題の実施状況

	「よくする」群	「時々する」群	「あまり・全くしない」群	合計	$\chi^2(df=4)$
設計能力高群	417(10.3%) <b>5.1</b>	456(11.2%) <b>-1.4</b>	669(16.5%) <b>-2.9</b>	1,542(37.9%)	75.31***
設計能力中群	240(5.9%) <b>-0.1</b>	395(9.7%) <b>5.2</b>	424(10.4%) <b>-4.8</b>	1,059(26.0%)	
設計能力低群	269(6.6%) <b>-5.0</b>	405(10.0%) <b>-3.4</b>	791(19.5%) <b>7.3</b>	1,465(36.0%)	
合計	926(22.8%)	1,256(30.9%)	1,884(46.3%)	4,066(100.0%)	

太字：調整済み残差      \*\*\*p < .001

高群の割合は「通っていない」群で有意に低く (n=989, **-4.2**)、「3日～毎日」の群で有意に高かった (n=205, **2.3**)。反対に、能力低群の割合は「通っていない」群で有意に高く (n=1,066, **5.3**)、「3日～毎日」の群で有意に低かった (n=140, **-3.3**)。なお、1回の塾などの時間との関係では、有意な差はなかった。そして、平均自宅学習時間との関係では、能力低群の割合は「しない～30分位」の群で有意に高く (n=885, **6.0**)、「2時間以上」の群で有意に低かった (n=255, **-4.1**)。

メディアとの接触については、以下の3項目であった。TVなどの視聴時間との関係では、能力低群の割合は「見ない～1時間30分位」の群で有意に低く (n=550, **-3.0**)、「3時間以上」の群で有意に高かった (n=443, **2.7**)。次に、携帯電話の所持との関係では、能力高群の割合は「所持」群で有意に高く (n=1,515, **2.7**)、「不所持」群で有意に低かった (n=29, **-2.7**)。反対に、能力低群の割合は「所持」群で有意に低く (n=1,410, **-3.2**)、「不所持」群で有意に高かった (n=57, **3.2**)。また、携帯電話の平均使用時間との関係では、能力低群の割合は、「3時間以上」の群で有意に高かった (n=487, **2.8**)。

この他、アルバイトの実施との関係では、能力高群の割合は、「よく・時々する、あまりしない」群で有意に高く (n=289, **3.2**)、「全くしない」群で有意に低かった (n=1,254, **-3.2**)。家事の手伝いとの関係では、

能力高群の割合は「よくする」群で有意に高く (n=294, **7.4**)、「全くしない」群で有意に低かった (n=217, **-4.0**)。反対に、能力低群の割合は「よくする」群で有意に低く (n=143, **-5.8**)、「全くしない」群で有意に高かった (n=320, **6.1**)。なお、部活動入部の有無および部活動参加度との関係では有意な差はなかった。

以上から、将来設計能力の高さが、屋外での遊びと関連するとともに、ゲームソフトなどの使用状況の影響を受けていることがうかがえた。また、学校・塾の宿題の実施状況および塾や習い事の利用状況、1週間の塾などの日数、さらに平均自宅学習時間が、その高さに関連していた。このことから、進路の実現のために一定の時間を費やして学習を進めることが将来設計能力の高さにつながっていると推測できる。なお、メディアとの接触については、TVなどの視聴時間および携帯電話の平均使用時間との関係からは、過度な視聴・使用時間が将来設計能力にマイナスの影響を与えていることが考えられた。一方、携帯電話の所持との関係からは、高校生が携帯電話を有効に使用している姿がうかがえた。アルバイトの実施、および家事の手伝いとの関係からは、「食事の楽しさ」などの関係と同様に、将来設計能力が家族関係を含めた人間関係のあり方と関連のあることが示唆された。

④学校生活：学校に対する親和感情との関係では、能力高群の割合は「とても好き」の群で有意に高く (n=

443, **12.6**)、「好きではない・嫌い」の群で有意に低かった (n=410, **-7.7**)。反対に、能力低群の割合は「とても好き」の群で有意に低く (n=170, **-8.8**)、「好きではない・嫌い」の群で有意に高かった (n=617, **8.4**)。登校拒否の感情との関係では、能力低群の割合は「よく感じる」群で有意に高く (n=304, **2.9**)、「あまり・全く感じない」群で有意に低かった (n=631, **-3.6**)。授業の理解度との関係では、能力高群の割合は「よくわかる」群で有意に高く、「あまり・全くわからない」群で有意に低かった。反対に、能力低群の割合は「よくわかる」群で有意に低く、「あまり・全くわからない」群で有意に高かった (表6)。なお、「あなたの現在の成績は、クラスの中でだいたいどのくらいですか。」と尋ねた主観的なクラス内成績順位との関係では、 $\chi^2$ 検定のみで有意な差が確認できた。

以上から、将来設計能力の高さと学校に対する親和感情、授業の理解度さらには登校拒否の感情に関連があり、将来設計能力の高さと高校生の学校生活に関する諸項目の間に双方向的な関係が形成されていることが推測された。

⑤情緒・感情・身体的側面：生徒の情緒・感情・身体的側面については、10項目全てで有意差が確認された。

「日常の肯定的感情」との関係では、能力高群の割合は「とても楽しい」群で有意に高く、「あまり・全く楽しくない」群で有意に低かった。反対に、能力低群の割

合は「とても楽しい」群で有意に低く、「あまり・全く楽しくない」群で有意に高かった (表7)。

日常の否定的感情を示す3項目、疲労感 (n=840, **2.2**)・焦燥感 (n=560, **2.8**)・攻撃的感情 (n=276, **2.2**)それぞれの有無との関係では、能力高群の割合は「よくある」群で有意に高かった。虚無感および倦怠感との関係では、能力低群の割合は「よくある」群で有意に高く (虚無感:n=340, **3.0**・倦怠感:n=365, **4.1**)、「あまり・全くない」群で有意に低かった (虚無感:n=586, **-4.1**・倦怠感:n=491, **-5.8**)。

次に、攻撃的行動の有無との関係では、能力高群の割合は「よく・時々ある、あまりない」群で有意に低く (n=886, **-2.8**)、「全くない」群で有意に高かった (n=656, **2.8**)。反対に、能力低群の割合は「よく・時々ある、あまりない」群で有意に高く (n=914, **2.1**)、「全くない」群で有意に低かった (n=552, **-2.1**)。様々な心理的な要因の影響と考えられる腹痛・頭痛などの有無との関係では、能力高群の割合は「よくある」群で有意に高く (n=352, **3.3**)、反対に能力低群で有意に低かった (n=702, **-2.8**)。

また、最近の気持ちとの関係<sup>7)</sup>では、能力高群の割合は「ポジティブな感情」の群で有意に高く (n=732, **2.9**)、「ネガティブな感情」の群で有意に低かった (n=705, **-2.9**)。反対に、能力低群の割合は「ポジティブな感情」の群で有意に低く (n=619, **-2.5**)、「ネガ

表6 将来設計能力 (高群・中群・低群) × 授業の理解度

	「とてもわかる」群	「わかる」群	「あまり・全くわからない」群	合計	$\chi^2(df=4)$
設計能力高群	201(4.9%) <b>9.5</b>	772(19.0%) <b>-2.1</b>	570(14.0%) <b>-3.1</b>	1,543(37.9%)	118.11***
設計能力中群	61(1.5%) <b>-3.0</b>	622(15.3%) <b>4.8</b>	380(9.3%) <b>-3.3</b>	1,063(26.1%)	
設計能力低群	60(1.5%) <b>-6.8</b>	729(17.9%) <b>-2.3</b>	677(16.6%) <b>6.1</b>	1,466(36.0%)	
合計	322(7.9%)	2,123(52.1%)	1,627(40.0%)	4,072(100.0%)	

太字：調整済み残差 \*\*\*p < .001

表7 将来設計能力 (高群・中群・低群) × 日常の肯定的感情

	「とても楽しい」群	「楽しい」群	「あまり・全く楽しくない」群	合計	$\chi^2(df=4)$
設計能力高群	533(13.1%) <b>13.2</b>	635(15.6%) <b>-4.3</b>	375(9.2%) <b>-7.5</b>	1,543(37.9%)	226.58***
設計能力中群	181(4.4%) <b>-5.6</b>	578(14.2%) <b>6.8</b>	304(7.5%) <b>-2.2</b>	1,063(26.1%)	
設計能力低群	235(5.8%) <b>-8.2</b>	636(15.6%) <b>-1.9</b>	592(14.5%) <b>9.5</b>	1,463(36.0%)	
合計	949(23.3%)	1,849(45.4%)	1,271(31.2%)	4,069(100.0%)	

太字：調整済み残差 \*\*\*p < .001

ティブな感情」の群で有意に高かった (n=748, **2.5**)。

以上の9項目の質問項目とは別に自尊感情を測定した。先に述べたように、その質問項目は、10項目(うち、5項目が逆転項目)で構成されている。評定は4件法を用い、「とても思う」を4点、「思う」を3点、「思わない」を2点、「全然思わない」を1点とした(逆転項目ではこの反対)。自尊感情得点の全体の中央値は22.00点、平均値は22.12点となった。そして、小谷ら(2016)と同様に、この平均値を基準に25~40点を自尊感情高群、21~24点を自尊感情中群、10~20点を自尊感情低群として群分けを行い、それぞれの構成比率は、29.4%、37.1%、33.5%となった。将来設計能力の高さと自尊感情3群の関係について $\chi^2$ 検定(表1)および残差分析を実施したところ、能力低群の割合は自尊感情高群で有意に低く(n=337, **-6.0**)、自尊感情低群で有意に高かった(n=550, **5.2**)。

次に、自尊感情平均得点を従属変数、将来設計能力3群(高・中・低群)を独立変数とした一元配置分散分析を行なったところ、将来設計能力の高さの影響によって自尊感情平均得点に有意な差があった( $F(2, 3956) = 24.48, p < .001$ )。さらに、等分散性が認められなかったため、TamhaneのT2検定による多重比較を行なったところ、能力高群と中群の間には有意な差はなかったが、能力高群は低群より、能力中群は低群より有意に高かった(表8)。

以上から、将来設計能力の高さと「日常の肯定的感情」、「ポジティブな感情」、虚無感、倦怠感および攻撃的行動の有無の間に関連があり、能力高群が「日常の肯定的感情」や「ポジティブな感情」を持ち、虚無感、倦怠感が低く、攻撃的行動を表出しない傾向がうかがえた。一方、日常の否定的感情を示す疲労感、焦燥感、攻撃的感情、さらに心理的な要因の影響と考えられる腹痛・頭痛などの有無では、能力高群の方がそれぞれをよく感じていることがうかがえた。なお、このことは小学生を対象として同様の分析を行い、疲労感および腹痛・頭痛などの有無との間に有意差がなかった結果(小谷, 2014)とは異なっている。以上から、将来の進路を真剣に考えることを周囲から要求されると考えられる高校生の多忙さと不安定さを示していると推測できる。

また、将来設計能力の高さと自尊感情の高さとの間に

関連があった。中学生を対象とした調査結果をもとに長谷川(1999)は、自尊感情の高まりが進路決定に関する自己効力の向上につながることを示唆している。また、前田・新見(2010)は、意思決定が高い高校生ほど生活満足度や自尊感情が高いという先行研究の知見を受け、個人差を考慮したキャリア意識の育成をめざしたキャリア教育の重要性を述べている。さらに小谷ら(2016)は、生活の諸側面を整えることで自尊感情を高めることが、高校生への心理的・発達の支援を効果的に進める上で有効であることを示唆している。

以上から、高等学校の生徒においても自尊感情を育成することが、キャリア教育を進める上で重要であると考えられる。

⑥家族・他者との関係：生徒の家族関係を表すと考えられる家族との会話の有無との関係では、能力高群の割合は「よく話す」群で有意に高く、「あまり・全く話さない」群で有意に低かった。反対に、能力低群の割合は「よく話す」群で有意に低く、「あまり・全く話さない」群で有意に高かった(表9)。家族の傾聴的態度との関係では、能力高群の割合は「真剣に聞いてくれる」群で有意に高く(n=1,295, **3.8**)、「聞いてくれない」群で有意に低かった(n=231, **-3.8**)。反対に、能力低群の割合は「真剣に聞いてくれる」群で有意に低く(n=1,113, **-6.0**)、「聞いてくれない」群で有意に高かった(n=331, **6.0**)。

次に、家族以外も含めた困った時の相談相手の有無との関係では、能力高群の割合は「いる」群で有意に高く(n=1,349, **6.1**)、「いない」群で有意に低かった(n=180, **-6.1**)。反対に、能力低群の割合は「いる」群で有意に低く(n=1,125, **-7.3**)、「いない」群で有意に高かった(n=318, **7.3**)。困った時の一番の相談相手との関係では、能力高群の割合は「父親」の群で有意に低かった(n=24, **-2.6**)。反対に、能力低群の割合は「母親」の群で有意に低く(n=297, **-2.2**)、「友人」の群で有意に高かった(n=681, **2.9**)。さらに、中群では「父親」の群で有意に高く(n=39, **3.6**)、「友人」の群で有意に低く(n=487, **-2.1**)。このことから、能力の高さと相談相手との関連の差が示された。

以上から、将来設計能力の高さと家族との会話の有無、家族の傾聴的態度、相談相手の有無および対象との

表8 将来設計能力(高群・中群・低群)別による自尊感情得点の比較

要因	平均値(SD)	F値	多重比較
将来設計能力高群(n=1,497)	22.45(4.76)	24.48***	>低群*
将来設計能力中群(n=1,039)	22.56(4.30)		>低群*
将来設計能力低群(n=1,423)	21.46(4.33)		<高群*, <中群*

\*\*\*p < .001 \*p < .05



表9 将来設計能力（高群・中群・低群）×家族との会話の有無

	「よく話す」群	「時々話す」群	「あまり・全く話さない」群	合計	$\chi^2(df=4)$
設計能力高群	658(16.3%) 9.0	542(13.4%) -3.8	335(8.3%) -5.4	1,535(38.0%)	112.42***
設計能力中群	347(8.6%) -1.3	458(11.3%) 3.2	256(6.3%) -2.2	1,061(26.2%)	
設計能力低群	383(9.5%) -7.9	578(14.3%) 0.9	487(12.0%) 7.5	1,448(36.0%)	
合計	1,388(34.3%)	1,578(39.0%)	1,078(26.7%)	4,044(100.0%)	

太字：調整済み残差

\*\*\*p < .001

間に関連があった。そして高校生においては、家族との傾聴的態度による会話、および相談相手が幅広く存在することが将来設計能力の高さにつながっていることがうかがえた。この結果は、小谷（2014）と同様に、「家族からの情緒的支持や自律性を尊重した養育態度が自尊感情、さらに進路決定に関する自己効力の高まりにつながる」との先行研究（長谷川，1999）の結果を支持するものである。一方、全学年の16.3%にあたる657名が「相談相手がいない」と答えている実態は、本人の対人関係および家族関係だけではなく、キャリア教育を推進する上での大きな課題と考えられる。

#### IV. 総合的考察

本論文では、現在の雇用状況の実態を受けてキャリア教育の必要性が生まれたこと、同教育が中学校・高等学校における進路指導を包含しながら、幼児期の教育から高等教育に至るまで体系的に進めることが求められていることを前提に、キャリア教育および職業教育で育成すべき「基礎的・汎用的能力」の一領域であるキャリアプランニング能力の中核と考えられる将来設計能力の状態と生徒の生活および心身の諸側面との関連を分析・考察した。そして、キャリア教育が学校教育のみならず、家庭を含めた社会全体で取り組むべき教育であることの意義について検討を行った。また、従来からの進路指導およびキャリア教育の重要な対象とされる高校生を対象とした生活実態調査の結果から、将来設計能力の一要因として将来の生き方や生活を考えることにつながる「夢の有無」の状態と生徒の生活および心身の諸側面の関連を分析・考察した。

その結果、睡眠の状態では、就寝時刻と起床時刻との関係から、就寝時刻・起床時刻の遅延化（「遅寝・遅起き」）などの睡眠習慣が、将来設計能力の高さと関連していることが示された。そして食事の状態では、食生活に関する環境と将来設計能力の高さの間に一定の関係のあることが明らかになった。なお、「食事の楽しさ」お

よび「食前の挨拶」との関係からは、将来設計能力が家族関係を含めた人間関係のあり方と関連していることが示唆された。

放課後の過ごし方については、ゲームソフトなどの使用状況、学校・塾の宿題の実施状況、さらにTVなどの視聴時間および携帯電話の平均使用時間などから進路の実現のために一定の時間を費やして学習を進めることが将来設計能力の高さにつながっていると推測できた。また、家事の手伝いとの関係からは、「食事の楽しさ」などの関係と同様に、将来設計能力が家族関係を含めた人間関係のあり方と関連のあることが示された。

次に学校生活の状態においては、将来設計能力の高さと授業の理解度などの高等学校における学校生活の状況が、互いに影響をあたえていることが示唆された。

さらに情緒・感情・身体的側面の状態では、将来設計能力高群が「日常の肯定的感情」や「ポジティブな感情」を持ち、虚無感、倦怠感が低く、攻撃的行動を表出しない傾向がうかがえた。一方、日常の否定的感情を示す疲労感などとの関係からは、将来の進路のことを真剣に考えることを周囲から要求されると考えられる高校生の多忙さと不安定さを示していると推測できた。また、高等学校の生徒においても自尊感情を育成することが、キャリア教育を進める上で重要であると考えられた。

家族・他者との関係からは、家族との傾聴的態度による会話、および相談相手が幅広く存在することが将来設計能力の高さにつながっていることがうかがえた。

以上から、高校生においても将来設計能力の高さと生活の諸側面の好ましい状態との関連が明らかになった。そして、学校教育のみならず、家庭を始めとする社会全体での取組を通して家族関係を含めた人間関係を形成していくことが、キャリア教育を進めていく上で意義を持っていることが示された。

#### V. 今後の課題

今回の分析においては、高校生の将来設計能力の高さ

と生活の諸側面の関連についてその全体像をつかむために1年生から3年生までを一括して分析したが、今後は学年を区切って分析することで、より詳細に高校生におけるキャリア教育と生活実態の関連を明らかにしていく予定である。また本分析のもとになる調査では、小谷ら(2011)が実施した調査で得られたデータを許諾のもと使用し、小谷ら(2015)の睡眠の質と高校生の生活の諸側面の関連を検討した先行研究の知見を受けて実施したため、キャリア教育で育成すべき「基礎的・汎用的能力」を明確に表す質問項目が設定できていなかった。そこで今後は、新たな質問項目を設定した質問紙調査を実施し、多変量解析法などを実施することによって構造分析を行い、各要因の関連性を検討する中で因果関係を明らかにしていくつもりである。

### 【注】

- 1) 「ニート (NEET)」とは Not in Education, Employment or Training (就学、就労、職業訓練のいずれも行っていない若者) の略で、元々はイギリスの労働政策において出てきた用語である。日本では、若年無業者のことをいい、「15～34歳の非労働力人口のうち、通学、家事を行っていない者」をさしている。  
厚生労働省「若者雇用関連データ」。  
<http://www.cmaj.jp/news/view/942>
- 2) 毛利 (2013) は、ワーキングプアのことを「働いて得た収入が生活保護の基準生活費に満たない場合で、その世帯が困窮していること」と定義している。
- 3) 文部科学省 (2015) 「平成27年度学校基本調査 (確定値) の公表について」。
- 4) 厚生労働省 (2015) 「新規学卒者の離職状況 (平成24年3月卒業者の状況) (別紙1) 学歴別卒業後3年以内離職率の推移」。
- 5) 厚生労働省 (2003) 「若者の未来のキャリアを育むために～若年者キャリア支援政策の展開～」(若年者キャリア支援研究会報告書)。
- 6) 文部科学省 (2011) 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について—中央教育審議会答申一。文部科学時報1623号, 152。
- 7) 望月 (2007) に基づき、ポジティブな感情として「しあわせ」・「楽しい」・「明るい」の3項目、ネガティブな感情として「さみしい」・「不安な」・「おこりっぽい」・「つらい」・「むかつく」・「びくびくする」・「暗い」・「心配な」・「何もかもがいやだ」の9項目計12項目をあげ、回答を求めた。

### 引用文献

長谷川龍彦 (1999) 中学生の自尊感情と進路選択能力の関連。

- 進路指導研究, 19(1), 35-43.
- 星野 命 (1970) 感情の心理と教育. 児童心理, 24, 1445-1477.
- 小谷正登・岩崎久志・加島ゆう子・河西利枝・木田重果・来栖清美・下村明子・白石大介・藤村真理子・三宅靖子 (2011) 「生活病理に抗するための生活臨床に関する実証的研究」研究報告書 (平成22年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 課題番号22530890).
- 小谷正登 (2012) 高校生における睡眠を中心とした生活臨床の可能性—保護者・教師への生活実態調査の結果をもとに—. 教職教育研究, 17, 24-32.
- 小谷正登 (2014) 進路指導とキャリア教育の関係に関する研究—小学生の生活実態調査の結果をもとに—. 教職教育研究, 19, 41-50.
- 小谷正登・来栖清美・岩崎久志・木田重果・加島ゆう子・三宅靖子・下村明子・河西利枝・白石大介 (2015) 高校生における睡眠を中心とした生活臨床に関する研究—高校生4,074名の生活実態調査の結果をもとに—. 日本学校心理学会年報第7号, 121-133.
- 小谷正登・来栖清美・岩崎久志・木田重果・加島ゆう子・三宅靖子・下村明子・塩山利枝・白石大介 (2016) 高校生の自尊感情と生活の諸側面の関係に関する研究—生活実態についての質問紙調査を通して—. こども環境学研究 12-2(34), 45-53.
- 前田健一・新見直子 (2010) 高校生と大学生のキャリア意識とアイデンティティ・スタイル. 広島大学大学院教育学研究科紀要, 59, 65-73.
- 毛利妃音 (2013) ワーキングプアと非正規雇用労働者の実態と変遷. 金城学院大学大学院文学研究科論集, 19, 66-42.
- 望月 昭 (2007) 対人援助の心理学. 朝倉書店.
- Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image. *Princeton University Press.*
- 高橋桂子 (2008) 生活設計シミュレーションを通じた将来設計能力の育成. キャリア教育研究, 26, 69-79.
- 竹原卓真 (2007) SPSS のすすめ 1-2 要因の分散分析をすべてカバー. 北大路書房.
- 白石大介 (2006) 子どもの生活習慣と意識—調査から見えてきた生活異変—. 西宮市教育委員会・西宮市小学校長会・武庫川女子大学共同調査報告書, 264-271.

### 付記

本研究および本研究のもととなる調査は、平成22年度日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究(C) 課題番号22530890, 研究代表者: 小谷正登) の助成を受け、執筆者のほか来栖清美 (森ノ宮医療大学)、岩崎久志 (流通科学大学)、木田重果 (西宮市教育委員会)、加島ゆう子 (西宮市立甲陵中学校)、三宅靖子 (天理医療大学)、下村明子 (愛知医科大学)、塩山利枝 (芦屋市教育委員会)、白石大介 (武庫川女子大学名誉教授) の各氏を含めた共同研究として実施した。

### 謝辞

本調査にご協力いただきました A 県立高等学校の生徒・保護者・教師および A 県立高等学校長協会の皆様

に御礼を申し上げます。

(こたに まさと・関西学院大学教授)